

中神苑

中神苑は、1895 年に平安神宮とともに一般公開された庭園の一つです。水と石を巧みに使うことで知られる、明治時代（1868～1912）の名作庭家、七代目小川治兵衛によって作庭されました。中神苑は池のある庭園で、西神苑（西の庭）よりも少し大きく、より開けた作りになっています。西神苑も、平安神宮創建時に七代目小川治兵衛により作られました。

中神苑は室町時代（1336～1573）に着想を得ています。室町時代には禅宗が繁栄し、能、茶道、造園、生け花などの発展に強い影響をもたらしました。

中神苑の庭は風通しが良く、小道の脇にはお茶を提供するスペースもあります。中神苑は、茶道やその他の日本の伝統芸能で重要とされる、不完全さの美「わびさび」を表現しています。

池を渡るように配された飛び石は、池からの眺めや、違った角度からの眺めを楽しめる、遊び心のある演出と言えるでしょう。高さや形、大きさの違った飛び石は、曲がりくねった道を描いています。

池の名前は蒼龍池といい、神宮の中庭の東側にある塔の蒼龍楼と同じ名前を冠しています。どちらも、古代中国の風水学の四つのシンボルのうちの一つである、東を表す龍の蒼龍にちなんで名づけられました。

中神苑には、ツツジ、睡蓮、オミナエシ（*ominaeshi*; *Patrinia scabiosifolia*）、日本のアイリスの種であるカキツバタ（*kakitsubata*; *Iris laevigata*）などが植わっています。